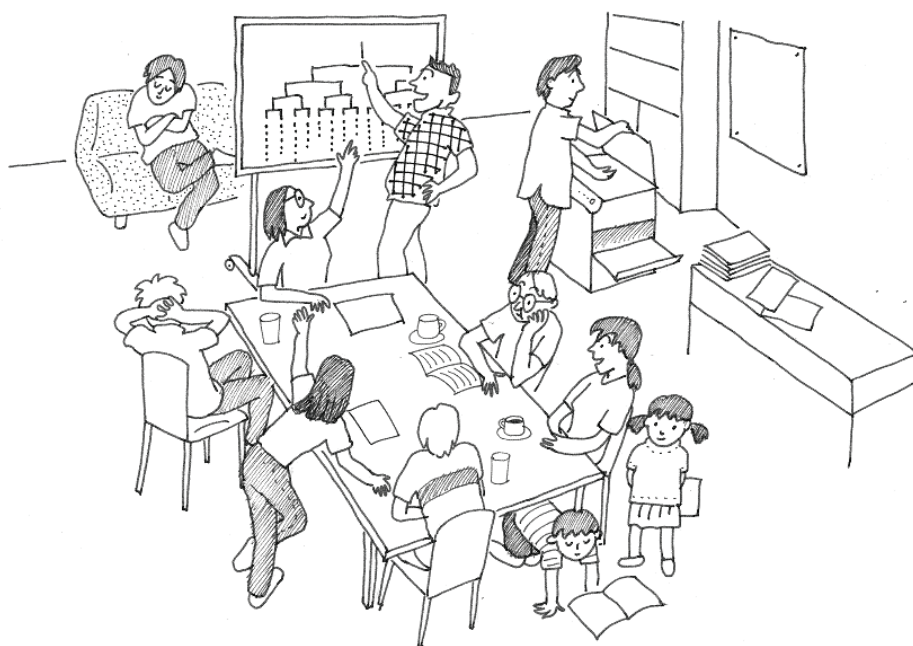


## Ⅱ 地域の活動事例

### 3. 人々のつながりを生み、まちの魅力を高める取り組みに育っている事例

ここでは、地域における雇用や新たなビジネスチャンスの創出、活動の担い手となる女性（男性）の人材の育成、活動を通して女性が発言力、実行力、組織力を高めるなど、人々のつながりを生み、まちの魅力を高める取り組みに育っている事例を紹介します。



# 森林バイオマスの利活用で、地域の活力を創出

環境モデル都市・下川町（北海道上川郡下川町）

## 活動開始のきっかけ

### 低炭素社会の構築と地域の活性化をめざして

下川町は、町面積 644 平方キロメートルの 90%が森林であり、昭和 28 年の国有林取得を機に、計画的な植林・育林・伐採による持続可能な循環型森林経営の基盤を築いてきました。地球温暖化が深刻化する中、2008 年、国が進める低炭素社会への実現に向けた取り組みとして、下川町が「環境モデル都市」に認定されました。これまでの取り組みをさらに発展させ、環境モデル都市推進室、推進町民会議を設置し、アクションプランの策定や具現化を図ってきました。再生可能な生物由来の有機性資源である森林バイオマスエネルギーの利活用や、高気密・高断熱・地域材を使用したエコハウス、森林ツーリズム、カーボンオフセット（経済活動などで排出される CO<sub>2</sub>などの温室効果ガスを植林、森林保護、クリーンエネルギー事業などで削減し、直接・間接的に相殺する活動）など、温室効果ガスの大幅な削減と持続可能な社会を目指して、さまざまな環境ビジネスに挑戦しています。

## 活動の内容

### 森林ビジネスで、雇用創出と持続可能な社会の実現に取り組む

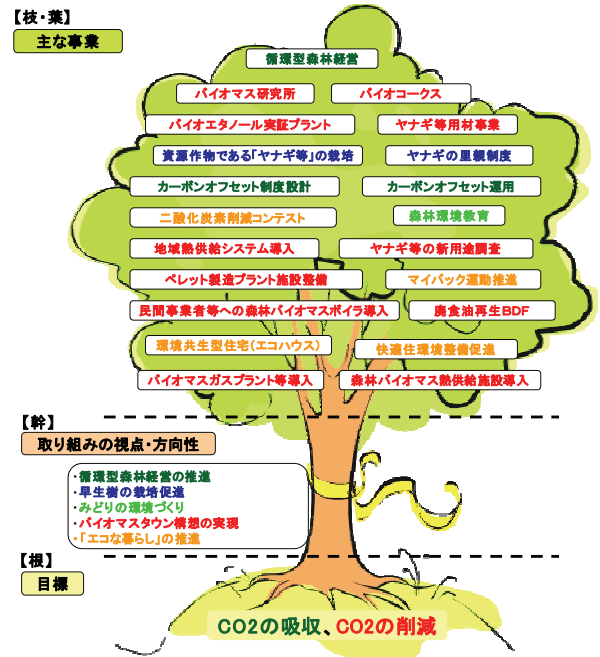
北海道の北東部に位置する人口約 3,700 人の下川町は、古くから森林と共に歩んできたまちです。豊富な森林資源を森林ビジネスに活かし、温室効果ガスの大幅削減に向けた独自の取り組みを行っています。また、森林組合による森林の整備など、Uターン・Iターン者も含め、多くの雇用を生み出しています。

#### ◎森林バイオマスエネルギー活用

現在、公共施設を中心に施設の燃料を化石燃料から木質バイオマスに代え、地域の未利用資源を有効に活用し、二酸化炭素の排出削減、地域経営コスト削減を実践しています。

#### ◎森林づくりから住宅づくりのシステム構築

木材の輸送にかかる二酸化炭素の排出を低減（ウッドマイレージ）し、木質バイオマスエネルギーを活用するなど、環境に配慮した住宅づくりを具現化したのがエコハウスモデル住宅「美桑」です。地域材の利用、地元の職人の手による高気密・高断熱材を使用した新築・リフォームに支援を行い、ゼロカーボン住宅の普及を推進しています。



アクションプラン（行動計画）の全体像

## ◎森林の多様な価値の創造

森林整備の過程で捨てられていた枝葉から、トドマツ精油を抽出し、商品を開発。この事業は現在、森林組合から特定非営利活動法人森の生活に引き継がれています。病院、福祉等の関係者によるアロマセラピーの研究や森林散策による心と体の健康づくり、生活習慣病対策など「森林療法」も実践されています。また、森の幼稚園、枝打ち、間伐、植林体験など、幼児から高校生まで一貫した森林環境教育により、「日本の森林づくり」の承継に向けた取り組みを実践。さらに、森林の二酸化炭素吸収機能を活用した「カーボンオフセット」、森林の多面的機能や環境価値を学ぶ「プラチナ企業の森」創設など、森林の持つ新たな価値創造による地域間交流を促進しています。

### 男女共同参画の視点

## 生活者の目線で企画・提案したレンタル・マイバッグの広がり

行政が先導的に環境モデル都市を推進する中で、市民による活動にも広がりが見えてきました。

消費者協会・商工会等が連携し、町内全世帯にマイバッグを配布し、マイバッグ利用者には買物ポイントを付与しています。

生活者の目線で環境問題を考え、環境に優しい手作りの生活用品を企画・提案、実践するグループ・若シユフ会は、家庭で使われずに眠っていたマイバッグを集め、マイバッグを口にくわえたカバのキャラクターを描いた「シモカバ」を製作、お店に置いてレンタルするしくみをスタートさせました。若シユフ会の取り組みを知った札幌市内の商店街や東神楽町の図書館でも、レンタルバッグを設置する動きが広がっています。

## エコハウスのコンペでは、女性の視点を活かした設計案を採用

エコハウス「美桑」は、設計プロポーザルコンペに参加した女性建築家の設計です。下川町で伐採された木材と、下川町の木繊維を使った断熱材を用いるなど、省エネ、環境負荷の少ない設計手法で建てられました。身近な材料や自然エネルギーの活用、暮らし方や暮らす人が変わっても対応できるフレキシブルなプランニングなど、環境にも人にもやさしい設計コンセプトに、女性の視点が感じられます。2010年にオープンし、その後の公共施設や一般住宅の建築に波及しています。低炭素の住宅推進をアピールするために、「美桑」ではライフスタイル全体で温暖化対策を体験できるよう、体験宿泊を実施。見学会、セミナーハウスにも利用されています。



環境共生型モデル住宅「エコハウス美桑」は、断熱材から風呂、燃料、食器に至るまで、下川産の木材をフルに活用している

### 団体プロフィール

#### 環境モデル都市・下川町

活動地域：北海道上川郡下川町（人口3,683人）  
 活動開始年：2008年7月 環境モデル都市認定  
 代表者：下川町長 安斎 保  
 役員の構成：—  
 会員数：人口3,683人（2011年3月1日現在）  
 事業規模：2010年度一般会計予算規模 51億円  
 ホームページ：www.town.shimokawa.hokkaido.jp  
 連絡先：01655-4-2511

# 自分の店からはじめて、まちを、地域を元気にする

アネッサクラブ（福島県会津若松市）

## 活動開始のきっかけ

### バブルの崩壊、道路工事計画をきっかけに、活動を開始

福島県会津若松市は人口 12 万 6000 人、400 年以上続いた城下町です。もともと会津では男尊女卑の気風が強く、女性は表に出ないのがよい、とされていました。ところが、バブルが崩壊し、「女性でも何かできることがあるのではないか」という想いが広がりました。

そんな折、会津若松市の道路をモール化する工事の計画が持ち上がり、女性も自分のまちは自分で創ることの大切さを知り、店とまちを表現する楽しさを実感するための取り組みが始まりました。大町通り 7 つの商店会を網羅して、地域を越えた地域づくりをしようとなったのです。まずは、自分の店の軒先を美しくということで、「のきさきギャラリー」を始めました。自分の店のことだから、女性も自分の意見を言うことができます。そうするうちに、まちの中でも意見を言えるようになっていきました。

こうして、じわじわと、段階を踏んで、意見を言えるようになっていった「姉さま」たちにより、「自分と店とまちづくり」を活動テーマに掲げたアネッサクラブが設立されました。

## 活動の内容

### 自分の店でできる活動、社会に向けた活動

#### ◎のきさきギャラリー

店の一角をギャラリーに見立て、昔から伝わる調度品や民芸品などのお宝を飾り、四季折々、会津の歴史や文化に彩られたギャラリーとして展開しています。

#### ◎4つのどうぞ

「お茶をどうぞ」、「お荷物をどうぞ」、「トイレをどうぞ」、「いすをどうぞ」という4つのサービスの中から、各店ができることを表示する活動です。このほか基本活動として店先の道路掃除や花と緑のストリートづくりに取り組んでいます。

#### ◎アネッサ大学

アネッサクラブの活動の幅が拡大したことを受けて、会員のエンパワーメントを図るため、「アネッサ大学」を企画・開催しています。最初は店での花の飾り方や、おもてなしの勉強から始まったのですが、最近は経営品質講座なども行っています。専門の講師をお願いして、女性が社会に向けて活動を起こす機会づくりを進めています。オープンセミナー形式なので、まちの人、遠方の人、男性の参加もあります。



「はいからさんに逢える街」は、明治・大正の衣装に身を包み、通りを“動くのきさきギャラリー”にするイベント

## ◎道路整備の提案

現在、アネッサクラブは、大町通りや野口英世青春通りの道路整備推進に向けた提案に取り組んでいます。アネッサ大学でまちづくりのエキスパートや会津大学の先生を招いての勉強会を行う他、“ORP”（大町通り活性化協議会）に参加し、ORPの若手メンバーとも連携しながら提案活動を行っています。

### 男女共同参画の視点

## アイデアだけでなく、順序だてて実践したことが、評価につながった

女性たちは、夫と同じ商店街に属していると思われていますが、必ずしも夫と同じ考えを持っているとは限りません。女性の視点で活動しようと集まったものの、最初はまわりからなかなか認められず、活動資金もありませんでした。その後、新潟県の公募事業に応募した「チューリップ染め」が採用になり、50万円を獲得できました。その時に実践した、まずは専門家を招いて勉強し、提案につなげる方法は、今も引き継がれています。

その後、アネッサクラブはテレビや雑誌で「4つのどうぞ」や「のきさきギャラリー」などの活動が次々に取り上げられたり、2004年度「ふるさとづくり賞」の総理大臣賞を受賞したことで、地域にもみとめられ、女性たちの自信となりました。成功も失敗もありますが、アイデアを出すだけでなく、順序だてて実践したことが、活動への理解と評価につながりました。

## 女性の視点からの提案が、行政も動かした

アネッサクラブが始めた「4つのどうぞ」は、市民、民間事業者、行政が連携して観光客を温かくおもてなしする会津若松市の「市民総ガイド運動」にも広がり、「傘をどうぞ」「駆け込みどうぞ」を加えた「6つのどうぞ運動」となっています。

また、通りに木がない、花もないと気づいて始めた「花とみどりのストリートづくり」は市役所でも取り上げてくれ、担当課（花と緑の課）ができました。

女性の視点からのさまざまな提案が行政を動かし、まちづくりの施策に反映されています。

## 現在の課題は、次世代を担う人材の育成

アネッサクラブの会員は女性が9割、男性が1割です。活動に積極的な男性がいる一方で消極的な男性もいますが、趣旨に賛同してくれる優良会員ととらえています。

現在の課題は、次世代を担うアネッサ・ジュニアを育て、活動を引き継ぐことです。女性が遠慮がちに育てられることはジェンダーに起因する問題であり、自分の考えを表明できる女性の人材育成が、男女共同参画の実践につながると考えています。

### 団体プロフィール

#### アネッサクラブ

活動地域：福島県会津若松市（人口126,253人）  
 活動開始年：1997年  
 代表者：渡辺 三千代  
 役員の構成：庶務2名、会計2名、監査2名（いずれも女性）  
 会員数：女性70人、男性8人 計78人  
 事業規模：300万円  
 ホームページ：<http://www.anessaclub.aizu.or.jp/>  
 連絡先：0242-22-2461

## 「民間の公民館」の実現

エコ工房 ひだまり（株式会社COCO企画コミュニティ事業部）（埼玉県川口市）

### 活動開始のきっかけ

#### みんなの笑顔がみたいから

「中高年の生きがい探し」を目指して地域でさまざまな講座を開いていた、ひだまりのオーナーの山田たみこさんは4年間の活動の中で、講座の開催場所を確保することに苦労していました。公民館の活用は個人の活動では優先的に利用できません。参加者の継続した受講希望に応えられる場が必要になり、また特定の場を作ることで、男性の参加や、日中は仕事をしている人も参加でき、人と人がつながる拠点となれるのではないかと2000年に川口市所有の元公園の店舗を借りスタートしたのが、「エコ工房 ひだまり」でした。



市が所有する元公園の店舗を借りている

### 活動の内容

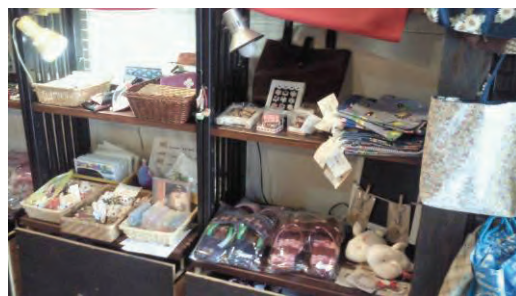
「ひだまり」は、みんながくつろげる「民間の公民館」として、飲食、物販、イベントなどを行い、自己実現、生き生き暮らす、社会貢献の場を目的としています。女性も男性もテーマ別に集まれる場を作っています。山田さんが、女性8名のスタッフを雇い、日々の業務を交代で担っています。

#### ◎コミュニティカフェ

店内は、カフェだけではなく、様々な地域の人々の手づくりの作品や、商品が陳列され、訪れる人の楽しみになっています。コーヒー350円、オム焼きそば630円、おやきセット450円などのメニューを用意して、一人で気軽に来店する中高年の女性やスーツ姿の男性客も来店し、食事をしながら、スタッフと会話がすすみます。

#### ◎講座の企画・実施

初心者囲碁講座、俳句教室、着付け教室、歌声カフェのほか木工でおもちゃを作るトントン倶楽部も月に2回開催しています。講師は地域の木工の技術を持つ男性がつとめ、職業で培った技術やアイデアを披露し、子育て中の女性が参加しておもちゃを作り、子育てに役立てています。



店内の販売品が並ぶ陳列棚

## ◎サークル活動

「ひだまり」の特徴は、店内で開催される市民団体のサークル活動です。多くは女性の集まりです。毛筆やハーモニカなど複数のサークルが教室を開いています。一人で来店した人でも、サークルの活動に興味を持てばその場で参加できる気軽さは訪れる人の「また来たい場」になっています。

## ◎異業種交流

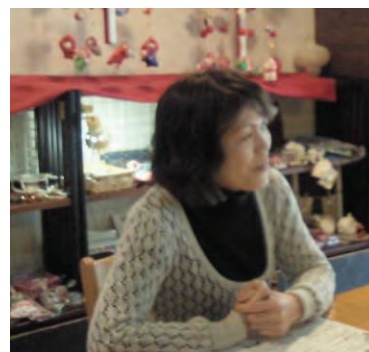
隔月開催している、ハートリンクスという異業種交流会は、地域の商店などの事業者が集まり、地域のニーズにどのように応え、事業を成長させられるか、について話し合います。交流会のあとは、「ひだまり」の店内は、居酒屋の様相に変化します。地元の事業者が、お互いの事業を知り、交流と連携が生まれ、地域の活性化に役立っています。

### 男女共同参画の視点

## サポーター制度の起用で参加者が広がる

「ひだまり」には、108名のサポーターがいます。55歳定年の後、関連会社への出向と並列にNPOへの出向をすすめた企業の政策によりお手伝いをしてもらえるようになった男性の存在がきっかけとなり、多くの男性サポーターが集まりました。年数回、研修会を行い、NPOがどんなことを求めているか、どんなサポートができるかを検討します。「ひだまり」では、店内の棚作りや、簡単な改装などをサポーターに依頼しています。

企業人であった男性が事業の継続性を考慮して、ビジネスの視点から運営について具体的なアドバイスをすることで、事業性が高まっています。男性は地域でのつながりや活動の場を持つことができます。



さりげなく来店者に声をかける山田さんの心遣いがこの店の敷居の低さになっている

## 「市民アシストネットワーク」との連携による生活サポート

「ひだまり」の店舗の2階は、「NPO法人志民アシストネットワーク」に事務所を提供しています。山田さんが理事をつとめるこの団体は、国際貢献や埼玉県「地域支えあいのしくみ推進事業」の指定を受け、地域生活をサポートする事業を行っていて男性も多く活躍しています。

食事も提供している『ひだまり』では、この団体と連携して快適生活サービスとして食事指導や栄養面のアドバイスをする講座を開催したり、専門家を招いて成年後見、財産管理や遺言の作成についての講座を開催しています。参加者は一人暮らしの女性が多く、地域生活のサポートに役立っています。



市民アシストネットワーク「安心おとどけ隊」パンフレット

### 団体プロフィール

エコ工房 ひだまり（株式会社COCO企画コミュニティ事業部）

活動地域：埼玉県川口市（517,239人）

活動開始年：2000年

代表者：山田 たみこ

役員の構成：スタッフは女性8名

事業規模：1億円（会社全体）、1000万円（コミュニティ事業部）

ホームページ：<http://www.hidamari-net.jp/>

連絡先：048-253-6306

# 「食」と「エネルギー」の自立を通して市民のネットワークをつくる

特定非営利活動法人 生活工房つばさ・游（埼玉県小川町）

## 活動開始のきっかけ

### 地域の人たちの参加を目指してテーマを「食」と「エネルギー」に

小川町に家を購入して引っ越してきた理事長の高橋優子さんは、2000年10月に生活工房「つばさ・游」を地域の女性たちと立ち上げ、地産地消の食やごみ問題などに取り組み始めました。顔と顔の見える信頼できる相互扶助型ネットワークをつくり、お金がなくても安心して暮らしていけるまちにすることが最終目標ですが、地域に住む人たちも巻き込むために共通の課題として「食」と「エネルギー」自給の地産地消モデルづくりをテーマに掲げました。2009年8月には特定非営利活動法人として事業の充実化をはかり、同年11月には小川町駅前に地域の拠点となるレストランをオープンさせました。



小川町駅前に地域の拠点となるカフェレストランをオープンした

## 活動の内容

### 自然と人と地域をつなぎ共に生かされて生きていきたい

#### ◎ミニコミ紙「おがわまちマップ」とメールマガジン「おがわまちマップ」を発行

ミニコミ誌は年数回発行し新聞に折り込み、メールマガジンは登録者に毎日発信し、小川町の最新の暮らしの情報を届けています。

#### ◎小川町産の有機農業の普及啓発活動

副理事長の金子友子さん夫妻の経営する循環型「霜里農場」見学会を主催。夫である金子美登さんを中心に日本初の有機の里を小川町下里で実現に協働しています。地元の株式会社オクタが「下里有機米」の全量を即金で再生産可能な価格で買い上げるという企業によるCSA（Community Supported Agriculture「地域に支えられた農業」）をマネージメントコーディネートし、仕組みを作りました。



有機農業の全国的なモデルとなっている下里の農園

#### ◎暮らしをエコ化する各種イベント、講座の企画開催

炭焼き体験・パソコン組み立て教室・有機野菜料理教室など女性の暮らしをカバーする講座を開催しています。若い人の啓発と参加を促すために、商店街の20～40歳代の女将さんを対象に地域の特色を生かしたビジネスづくりの講座を企画したり、町の商店の若い後継者のメンバーとともに未来を考える委員会等を立ち上げています。

#### ◎食と農に関する食農教育事業

食糧の輸送量に輸送距離をかけた数字で示す“フードマイレージ”を使って地産地消の大事なポイントや地球温暖化を防止するために大人や子どもに向けて学習会を開催しています。

#### ◎持続可能な環境型社会のモデル事業構築

農家が菜種を栽培し、農機具の燃料にし、食料生産における環境負荷を少なくし食料自給率を上げる「農機具のSVO（ストレートベジタブルオイル）化事業」を2011年3月から始めました。



### ◎地産地消の商品開発

小川産の有機栽培の地大豆で作る豆腐、小川産のジャガイモで作るコロッケなどを企画し、商店の活性化を支援しています。

### ◎小川の野菜が主役の市民と農家協働の日替わりシェフレストラン

曜日ごとに7人の担当を決め、地産地消の有機野菜の美味しさやそれぞれの特性を生かしたランチやティータイムメニューをお母さんたちの手作り料理で提供しています。各種イベントや貸ギャラリーとして人が出会う場でもあり、壁面のコミュニティボードは、情報交換の場となっています。

### ◎新規就農者支援

霜里農場の研修を終えた若者の就農までを支援するために「1軒の農家を30人で支えよう」プロジェクトで提携消費者とマッチングし、有機農業を志す人たちの農村インターン支援も実施。

### ◎山—川—田んぼをつなぐ

下里集落の田んぼの水源である仙元山の里山保全を、企業のCSRを活用して行い、山と川と田んぼを結び、地域の環境を総合プロデュースしています。

#### 男女共同参画の視点

### 経済の視点を入れて男性も参加しやすい地域活動へ

女性は、暮らしにまつわる身近な食や環境や子育ての地域活動に参加してきますが、地域活動や家庭への関わりが少ない男性の参加はなかなか難しいのが現状です。男性をはじめ誰もが参加しやすくするため、活動テーマに「食」と「エネルギー」の自立を目標として設定し経済の視点を盛り込みました。

### 講座を通して若い女性の視野を拡げネットワークする

小川町商店街研修会として「有機農業・和紙・自然・地産地消—地域の宝を活かしたしあわせな地域づくり」を企画し、商店街の若い女性たちに参加を呼びかけました。小川町の未来のまちづくりを考える時、商店会の若い女性の視点は重要です。また、家族経営のお店を手伝うことに忙しく、外とのコミュニケーションをとることが難しい女性たちの出会う場が必要とも考えたからです。

まちあるき・商店街の見つめ直し・具体的なプラン内容の検討・計画書作成・プレゼンテーションと意見交換会といった連続講座を通して、酒蔵と化粧品店とのコラボレートによる酒かすを使ったエステ講座、自転車で町内を走るツールド小川、農村風景の写真を特産の和紙にプリントするなどの具体的な事業が考案され実施されつつあります。

### まとめる「コーディネート」から事業的視点のある「マネージメント」へ

地域にピンポイントで存在しているさまざまな力を持った人たちを結びまとめる役割が必要であり、コーディネートすることを活動の主軸にしてきました。これからは作り上げてきたしくみをマネージメントし、地域の中でお金が回り豊かになる「しあわせな絆のまちづくり」をめざしています。

#### 団体プロフィール

##### 特定非営利活動法人 生活工房つばさ游

活動地域：埼玉県小川町（33835人）  
 活動開始年：2000年（法人設立2009年）  
 代表者：高橋 優子  
 役員の構成：女性3人、男性1人 計4人  
 会員数：女性14人、男性4人 計18人  
 事業規模：500万円  
 ホームページ：生活工房「つばさ・游」 <http://tubasa-u.com/>  
 生活工房「つばさ・游」ブログ <http://blog.goo.ne.jp/tubasayuu>  
 べりカフェつばさ・游 [http://blog.goo.ne.jp/seikatukoubou\\_1953](http://blog.goo.ne.jp/seikatukoubou_1953)  
 連絡先：090-4453-6355（高橋）

## 豊富な人脈を活かして「新しい里山・銀座」をめざす

特定非営利活動法人 銀座ミツバチプロジェクト（東京都中央区）

### 活動開始のきっかけ

#### 「ミツバチ」がつなぐ人と人の縁…

2006年、勉強会の講師を探していた紙パルプ会館の田中常務は、知人を介してビルの屋上を探している養蜂家を紹介され、「場所を貸してあげて、蜂蜜を場所代としてもらうのも面白いな」と考えたのでした。ところが養蜂家の一言、「飼うならしっかり学びなさい！」が引き金になって、それまで銀座の「食」についてのシンポジウムを開催してきた「銀座食学塾」と銀座の街の歴史や文化を勉強していた「銀座の街研究会」の有志たちが集まって、「ミツバチの飼育を通して銀座の環境と生態系を感じるとともに、採れた蜂蜜等を使って銀座の街との共生を感じよう」という目的のNPO法人をスタート（させてしまった）のです。バーの支配人、パティシエ、演劇プロデューサー、心理カウンセラー、ランドスケーププランナー、弁護士、アナリスト、クラブのママさん達まで豊富な人材がメンバーです。危険ではないかなどの反対もあったので、周辺商店街、消防、区の公園緑地課などにも話に回り、心配されながらも養蜂が始まりました。

消費するだけだった街・銀座が生産する街へ変わってきました。採取した蜂蜜は5年間に150キロから900キロにもなりました。商店会や教会、地元の老舗の若旦那など個人や団体のサポーターも増えました。この縁を通じて、蜜源を確保する必要から屋上緑化をすることへ、蜂蜜をカクテルや化粧品、菓子類などへと商品化し、売り上げの1%を銀座の環境へ投資するなど、活動は「多角化」しました。緑化を通じて地方都市との縁、農一商一工連合が出来ています。札幌、仙台、福島、名古屋、小倉、梅田など日本全国にミツバチプロジェクトは広がってきました。ソウルや台湾からも調査が来ています。ミツバチや緑化の世話を福祉作業所のメンバーがやりたいという話も始まりました。様々な領域、全国、全世界に広がった秘密について、「地域再生には連携が大切、優れたプロジェクトは情報共有して皆に成果を返していくことが大切だ」と田中さんは考えています。

### 活動の内容

#### ◎都市養蜂活動・採蜜活動

銀座のビルの屋上に設置した巣箱で、蜂蜜を採取する都市型養蜂が基本の活動です。皇居、日比谷公園、浜離宮など意外に豊かな銀座の自然環境が蜜源となっています。西洋ミツバチ、日本ミツバチを飼っています。採蜜活動には会員を始め、様々な人が参加します。

#### ◎屋上農園：ビーガーデン

屋上緑化を推進している百貨店や企業の屋上で、小学生、障害者、在住・在勤区民などによる花植え、田植えなどの緑化活動をしています。連携した地方の農園からもイチゴの苗や菜の花が送られ、



蜜の採取は蜂に敬意を表して「正装（「白いユニフォーム）」で…

植え込みがされます。屋上農園は、屋上緑化のためのものでもあり、蜂の蜜源であるとともに、環境共生、都市と地方をつなぐ大事なしかけです。いま、8か所の屋上に農園が出来ています。

### ◎地産地消活動

銀座で採れた蜂蜜、米、野菜、果物などを使って、銀座の百貨店、飲食店などで販売、提供するものを開発しています。蜂蜜でつくるスイーツは、老舗の菓子店のカステラになっています。老舗のバーには、蜂蜜を入れたカクテルがあります。クリスマスやバレンタインのケーキやチョコレートにもなっています。酒造会社の屋上の酒米から作った日本酒は、れっきとした銀座産です。枝豆は銀座のクラブに提供されています。蜜蝋は、教会のろうそくに使われています。これらはすべて「銀座ブランド」として、広まっています。

### ◎フォーラムやシンポジウムの実施を通じた普及啓発、交流活動

毎年3月には「都市から農村フォーラム」を実施、蜂のために屋上の植物を提供している農村部と、収穫した材料を加工している銀座の企業などが集まり、交流しています。

### ◎機関誌「銀ぱち通信」の発行

機関誌「銀ぱち通信」は第1号を2008年1月に発行し、現在第10号まで発行されています。ITや編集のプロたちが制作をサポートしています。HPも作っています。通信は1万数千部を発行し、銀座のホテルなどに置いています。

## 男女共同参画の視点

### 銀座の多彩で豊富な男女の人材を集めて、出会いを大切に、活動を広げる

養蜂から屋上緑化へ、銀座ブランドの創出へ、地方の産地と都市との交流へ、障害者との交流から福祉領域への進出へと、銀座から世界へ活動を広げています。新しい活動のアイデアも、蜂蜜の新しい利用方法も、すべて出会いを通じて広がってきました。初め、「なんで養蜂？」と疑問を持った人も、採蜜を一緒にやると、夢中になって引き込まれています。蜂の持つ、生命力に感動するのです。人と人の出会いを大切に、銀座の多彩な男性女性の人材を集めています。

### 男性の世界だった養蜂業に若い女性が興味を持つようになった

これまで日本の養蜂業は、男性が担ってきました。養蜂業者は、いま、ピーク時の15,000人から2,500人程度に減少しているといえます。銀座ミツバチプロジェクトは、「しろうと」の集まりだからこそ全く違う切り口で養蜂業を始め、たくさんの若い女性たちが「ミツバチを飼いたい」といって集まってきました。女性にとって、新しい世界へのチャレンジが始まっています。

## 団体プロフィール

### 特定非営利活動法人 銀座ミツバチプロジェクト

活動地域：東京都中央区（人口117,608人）  
 活動開始年：2006年（法人設立2006年）  
 代表者：理事長 高安 和夫  
 役員構成：女性 0人、男性 3人 計3人  
 会員数：200人  
 事業規模：1,500万円  
 ホームページ：www.gin-pachi.jp  
 連絡先：FAX：03-6277-8888

## PTA 活動が女性たちをエンパワメントし、学校と地域をつなぐ活動につながった

特定非営利活動法人 スクール・アドバイス・ネットワーク（東京都杉並区）

### 活動開始のきっかけ

### PTA 活動から生じた、地域の学校に対する問題意識

スクール・アドバイス・ネットワーク（以下、S.A.Net）は、PTA 活動から生じた地域の学校に対する問題意識と、解決に向けた想いが核となり、学校教育支援と地域活性化をつなぐことを目的として立ち上げた NPO です。

きっかけは、学校には求められるものが増えすぎて、子どもも、先生も、保護者も、それぞれに負担が大きくなる一方で、子どもの自立や子どもの幸せにつながる“学び”がない、と気付いたことでした。かつて、自分の身の安全を守るための方法や、生活に必要な知識・技術など、子どもたちが本来身につけなければならない知恵は、地域社会の中にありました。ところが、子育て家庭の孤立化が進み、高齢者による関わりや、子どもが興味を持てるようなきっかけも減っています。そこで、S.A.Net は「学校はもっと地域に開いた方がよい。性・年齢に関係なく地域の人達が何らかの関与をし、みんなで子どもを育てることが必要ではないか」と考え、学校と地域をつなぐ構想が生まれました。

### PTA 活動で培ったスキルとネットワークが、現在の活動にも活かしている

S.A.Net の理事は全員女性で、PTA 会長の経験者という共通点があります。理事長の生重さんは当時をふりかえり、PTA 活動では課題を明確にし、仕事力や交渉力を発揮して能動的に動くことが求められたことで、仕事にも通用する能力が磨かれたと感じています。PTA 活動が女性たちをエンパワメントし、活動する中で培われたスキルとネットワークが現在の活動にも活かされています。

### 活動の内容

### 学校教育支援と地域活性化をつなぐ

#### ◎学校教育のコーディネート

杉並区立小中学校や都立高等学校における教育支援コーディネートを行っています。例えば、最前線で仕事をする人たちに、学校の勉強がどのように仕事に役に立っているかを語ってもらうと、子どもたちの納得感や、大人への憧れを引き出すことにつながります。また、大人自身も自分の仕事に対するモチベーションが上がるといった効果があります。地域の中の多様な世代の人のつながりが生まれ、「自分は必要とされている」という実感や自尊感情を育てています。



大人が「学校で勉強したことが、現在の仕事にどう役立っているか」を話すことで、子どもたちは「勉強することが社会の役にたつんだ」と納得する

### ◎講座・イベント企画運営

総合的な学習の時間を進めるため、保護者や地域や民間企業等の協力が欠かせないと考え、ゲストティーチャーや学校サポーターなど人材の養成にも積極的に取り組んでいます。

日頃から行っている学校支援の活動の中で必要とされる人材ニーズを察知し、インストラクター養成講座を企画し、修了者には学校支援の活動に参加してもらっています。



ゲストティーチャーや学校サポーターなど、人材の養成にも積極的に取り組む

### ◎余暇活動支援

土曜日や放課後は、体験活動や学習活動を応援しています。

S.A.Net は土曜日学校の企画運営、プログラムの提供をし、運営には学生ボランティアや地域の人達が関わっています。

### ◎キャリア教育

S.A.Net は「まちづくりは、人づくり」と考えています。自分の意欲や発想で、地域経済の活性化に貢献できる人が住みつき、多世代化すると、そこにまちづくりのムーブメントが起こります。平和、環境、技術力など、日本の魅力を世界に発信する平和的ビジネスを起こすことを目標に、キャリア教育など新しい活動にも取り組んでいます。

## 男女共同参画の視点

### 多様な人が自分の好きなこと、得意なことで活動している

S.A.Net では、多世代・多様な地域の人材が、自分の好きなこと、得意なことを活かして学校を支援しています。高齢者世代も紙芝居や伝承遊びを通して仲間ができ、子どもとのふれあいも生じるなど、人と人とのつながりが生まれています。

### ペイドワークを基本とし、女性の経済活動を促進

S.A.Net では子育て世代の主婦や海外生活経験者など、多数のボランティアが活動していますが、すべてペイドワークとしています。その人が、年齢や状況によって選んだ働き方で、意欲を持ってする仕事は、すべてペイドワークでなければならない、考えているからです。

### 「多様な生き方がある」ということを子どもたちに伝えたい

今後は、小学校・中学校・高等学校への支援というこれまでの活動の延長線上に、大学生のキャリア教育の必要性も感じています。子どもたちに「それぞれに幸せの形があり、多様な生き方があることを伝えたい」という願いが、S.A.Net の活動を広げています。

## 団体プロフィール

### 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク

活動地域：東京都杉並区（人口526,536人）、東京都、全国

活動開始年：2002年

代表者：生重 幸恵

役員の構成：女性3人、男性1人 計4人

会員数：女性8人、男性2人 計10人

事業規模 1億4000万円

ホームページ：<http://sanet.jp/>

連絡先：03-5347-2372

## 「冬水田んぼ」で日本の環境再生をめざす

特定非営利活動法人 メダカのがっこう（東京都武蔵野市）

### 活動開始のきっかけ

### 食をきっかけに、農家支援と田んぼによる環境再生に取り組む

メダカのがっこうは、メダカやトンボ、シラサギなど、多くの生き物が生息する不耕起栽培の田んぼ（千葉県香取市）の応援団から始まりました。自然再生力に注目していた雑誌の編集者、「海のミネラル研究会」（中村陽子さん主宰）などのメンバーが理事となり、「田んぼから日本の自然再生を」という夢を実現させるため、2001年にNPO法人を立ち上げました。

会員は、農家が「日本の水田を守る会」のメンバー（約20人）、消費者は「海のミネラル研究会」のメンバー（約200人）で、企業や他の理事たちの田んぼの応援団も加わり、さらに理事にマスコミ関係者が多く、新聞雑誌に取り上げられたこともあり、1年目で300人ほどが集まりました。しかし、その後は400人からなかなか増えず、2008年に都市部の市民向けに開催した「日本人の食・身体の立て直しを進める野草料理教室」「基本的な食、米・味噌・醤油などを材料から作る自給自足くらぶ」の活動が注目され、会員は約700人に増えました。大半が女性です。

環境を再生し、生きるための基本的な力をつけておきたいという強い思いが、この活動の原点です。1人ではできないこのような取り組みが、今の時代に必要だという認識は広がりつつあります。そうした中、農家と連携し、岩手県、福島県、新潟県、栃木県、静岡県、千葉県にも活動の場を広げています。



9月の稲刈り。鎌で手刈りして束ね、ハサ掛けにして天日干しをする。米づくりの大変さを実感

### 活動の内容

### 米づくり体験、食のセミナー、農家と都市部の交流

#### ◎教育事業

##### ・田んぼ体験

荒地を復活させた栃木県茂木の棚田で、いのちの循環を学ぶ「体験の場」をつくっています。農家の協力で、田植え、草取り、稲刈り、生き物調査を季節ごとに実施。学校や企業対象の、田んぼ体験企画も受け付けています。

##### ・野草料理教室事業

野草を使った料理教室を年3回開催。

##### ・セミナー事業

「冬水田んぼ」について、一般向けの講演会やシンポジウムを開催しています。



「茂木の棚田」で田植え体験。生きものいっぱいの田んぼで田植えから稲刈りまでを体験でき、グループでオーナーにもなれる

### ◎普及事業

除草剤を使わない米づくりをする農家の情報交換の場「田の草フォーラム」や交流会を開催する他、田んぼに関するDVDやビデオテープ、教材を販売しています。

### ◎支援事業

新潟県佐渡で田んぼづくりによるトキの生息環境整備を行う「トキプロジェクト」、栃木県茂木で、茂木里山自然学校や田んぼイベントを開催しています。

また、「ありがとう田んぼ」支援事業、おむすび茶屋支援事業に取り組んでいます。「田んぼ」のお米を食べてくれる人を増やそうと神田神保町に「おむすび茶屋」をオープンしました。

### ◎調査事業

2003年から、年4回、8カ所で生き物調査を行っています。



「おむすび茶屋」のおむすびは、玄米、黒米、キビなど種類も豊富。早朝から営業し、お昼前後は丁だの列。身体が喜ぶメニューとして野草、薬膳料理もある

## 男女共同参画の視点

### 自分で採り、加工し、食べるプログラムを通して、食生活を立て直す

田んぼ体験は、若い独身女性の参加が目立ちます。最近では家族連れや夫婦での参加も増えてきました。子どもも楽しく参加しています。

野草料理教室は、身近な野草を採って料理し、食べることを通して、食生活の立て直しを考えるプログラムとなっています。参加者から「野草は命の源泉だと気づき、生きる力を体感した」という感想が寄せられるなど、「食」に対する意識を高めることに貢献しています。

### 環境再生で生きる力をつけたいとの思いが、農家と都市を結ぶ活動に発展

メダカのがっこうは、田んぼから日本の自然環境を再生したいという願いから、田んぼづくり、セミナー、交流、イベント、生き物調査などを行ってきました。今では、都心でおむすび茶屋も開業し、米づくりから消費までの一貫した流れに沿って、農家と都市を結ぶ活動へと発展しています。環境を整える・つくる・加工する・食べるという一貫した活動に参加することで、さまざまな地域、さまざまな年代の人々が、田んぼの大切さ、多様な生き物の必要性を体感し、生きる力をつけています。

今後は米を食べる人、米を作る面積を増やす活動を両輪に、農家と都市部の人がつながり、自給自足村「むらびと構想」も実現させたいと動き始めています。全国の「冬水田んぼ」を紹介するサイトの立ち上げや、全国農園マップづくりも企画中です。

## 団体プロフィール

### 特定非営利活動法人 メダカのがっこう

活動地域：東京都武蔵野市（人口135,577人）  
 活動開始年：2001年（法人設立2001年）  
 代表者：中村 陽子  
 役員の構成：女性2人、男性5人 計7人  
 会員数：女性321人、男性388人 計709人  
 事業規模：2000万円  
 ホームページ <http://www.npomedaka.net/>  
 連絡先：0422-70-6647

## 自分の地域の問題を解決することが、一番の人材育成

株式会社 御祓川（石川県七尾市）

### 活動開始のきっかけ

### 市街地の核を結ぶ軸として、企業経営者らが御祓川<sup>みそぎがわ</sup>の浄化・再生を決意



七尾市街を流れる御祓川。市街地の核を結ぶ軸として、川の再生はまちづくりの課題だった

石川県七尾市は、能登半島の中ほどに位置し、古くから港町として栄えた約6万人の人口を擁する能登半島の中核都市です。昭和の終わり頃、都市活力の衰退を懸念した青年会議所の若手経済人を中心に、港を中心としたまちづくりが始まりました。七尾港の「能登食祭市場」と駅前再開発ビル「パトリア」を結ぶシンボルロードの横には、地盤沈下による河床勾配の減少、放水路の整備による流量減少、生活排水の流入によって、水質汚染が進んだ御祓川がありました。企業経営者らは、2つの核を結ぶまちづくりには御祓川の再生が不可欠と考え、御祓川の

再生とその界隈の賑わいづくりを目的とする株式会社御祓川を1999年に設立しました。組織形態は主体を明確にし、自己責任によって事業を進めるため株式会社としていますが、利益は配分せず、ミッションに応じて次の事業展開に活かす点では、NPOと同じ非営利性を持っています。

### 活動の内容

### まち育て・みせ育て・ひと育て

#### ◎御祓川の浄化に関わる事業：まち育て

水質浄化の技術を持つ企業に呼びかけ、御祓川浄化方策の提案をもとに、シンポジウムを開催し、検討内容を県・市に提案することにより、ヘドロの浚渫など公共事業化につなげました。

また、七尾商業高校の生徒からの提案を基に、県・市・NPO・企業・学校による共同研究体をつくり、水質浄化システムの実験を行いました。2003年度は助成金を受けて本格的な実証実験を行い、御祓川方式の浄化装置を完成させています。

また、地域固有の資源の活用とその担い手を育てることを目的とした能登旨美オンパク「うまみん」の事務局を務め、着地型観光のプログラムを実施しています。2011年1月～3月にかけてのプログラムでは、講師の男女比は、おおよそ女性2：男性3となっています。

#### ◎界隈のにぎわいを創出する事業：みせ育て

七尾街づくりセンター株式会社が施設整備を行い、株式会社御祓川が管理運営を行うことで連携し、商業インキュベーター施設である「寄合処 御祓館」を整備しました。現在は、飲食店とギャラリーが開業しています。テナントとして入居するための条件は特に設けていないため、地域で起業したい女性や、若者の雇用創出にもつながる可能性があります。



## ◎コミュニティ再生に関わる事業：ひと育て

株式会社御祓川では、ふるさとの川の再生を心から願う人々が集まって2000年に設立したNPO「川への祈り実行委員会」の事務局も担当しています。川への祈りファンドとして資金を集め、市民に対して日頃から生活排水に気をつけるよう協力を呼び掛けたり、市民が汚れた川と関わりを持つことを目的とした川そうじ&川あそび、セミナー、コンサート、ラジオ番組の放送など、川と市民との関係を取り戻し、市民が主体的に関わって川の再生を進めるための活動を展開しています。NPOが活動を開始してから10年が経過しましたが、活動の担い手は女性の方がやや多くなっています。

また、力を入れているのが、2010年度から始まった「能登留学」という長期実践型インターンの受け入れです。最低3カ月間、期間限定の社員として、実際のプロジェクトに参画してもらうしくみで、2010年度は女性2人・男性2人の計4人の学生を受け入れています。

### 男女共同参画の視点

## 「川に目を向ける人々を増やす」という発想で、川の再生をめざす

2007年、コンサルタントとして中心市街地のまちづくりに関わっていた森山奈美さんが代表取締役社長に就任し、「まち育て・みせ育て・ひと育て」というコンセプトを打ち出して、川の再生につながるしかけを次々と提案・事業化し、現在に至っています。

株式会社御祓川が手掛ける川の再生事業は、川に目を向ける人々を増やし、市民の財産としての川の価値を確かめ合う場として「店」を使うことが特徴となっています。例えば、株式会社御祓川がプロデュースを手掛けた美容院では、川の風景を楽しみながら髪の手入れができ、「川がきれいになったらいいね、できることからやろうね」という会話が生まれ、経営者もパーマ液等の排水は無害にしてから流すなど「川のあるまちで商売をさせていただく」という姿勢を貫いています。

## 人々が関わり、自分の地域の問題を解決することが、一番の人材育成

株式会社御祓川は、人々が関わって、自分たちの地域の問題を解決することが、一番の人材育成だと考えています。川のまわりに町との関わりを重視した店をつくり、人、もの、情報、文化の交流を生みだすしかけをつくることで、関わる人が増え、人材も育ってきています。ピラミッド型の組織ではなく、上下関係のないフラットな組織の中で、活動の担い手を育て、つなぎ、後押しをするコーディネーターが必要だと感じています。



「川はともだち」を合言葉に、市民が気軽に川との関係を結ぶことを目的とした川そうじ&川あそびを毎月実施している

### 団体プロフィール

#### 株式会社 御祓川

活動地域：石川県七尾市（人口58,580人）  
 活動開始年：1999年  
 代表者：森山 奈美  
 役員の構成：女性1人、男性6人 計7人  
 従業員数：11人  
 事業規模：6,600万円  
 ホームページ：<http://www.misogigawa.com/>  
 連絡先：0767-54-8866

## 事例 33

# 映画づくりで発揮された女性の力が、地域のつながりをつくる

えな心の合併プロジェクト／特定非営利活動法人 えなここ（岐阜県恵那市）

### 活動開始のきっかけ

## バラバラの地域を、大きな一つにつなげたい



ふるさとの人々を優しく包み込む自然。その半面「田舎」が抱える矛盾や葛藤を、映画で描く

2004年10月、岐阜県恵那市、岩村町、山岡町、明智町、串原村、上矢作町の6市町が合併しました。しかし、合併後もかつての行政区は生きており、地域同士がバラバラで交流が持てないという問題がありました。その頃、「地域や世代を越えて人がつながることはできないか」と考えた市職員がいました。各地域の文化をみんなの財産として共有していくためにはそれぞれ町・人を知らなければなりません。市職員の思いは「映画を使ったまちづくり」に取り組む映画制作会社 FireWorks の林弘樹監督と出会ったことで、次第に形をとりはじめます。商工

会議所の青年部や市民グループなどに働きかけ、映画で人と地域をつなぐ「えな心の合併プロジェクト」が誕生しました。

「えな心の合併プロジェクト」は、行政の発想に市民が従ったというわけではありません。行政もプロジェクトのメンバーの一員として、主婦や学生など世代を超えた市民とともに参加しています。

### 活動の内容

## 映画のテーマは「地域のつながり」、「消防団活動」

映画をつくるにあたり、制作スタッフと恵那市の人々は、1年くらいかけてストーリーを話し合いました。脚本家もストーリーを提案しましたが、恵那市の人々にとってはピンとこない内容だったのです。

はじめに「おかげさま」というテーマがありました。メンバーの中には消防団に入っている人が多く、話し合いを重ねる中で「消防団活動」が話題に上りました。消防団は世代を越えたつながりもあり、地域に密着した活動で地域をつないでいるにも関わらず、消防団以外の人には何をしているかわからない。消防団が活動独居老人の安全対策など、地域の安全を守る活動をしていることは、皆が知るべきだろう。消防団の「自分のまちは自分で守る」という意識を全体に広げることが、町を考え、助け合う思いを表現することになるということで、映画のテーマは「地域のつながり」「消防団活動」と決まりました。

## 女性の視点で気付いた「消防団活動」の問題点

ところが、女性のメンバーからは「消防団の操法大会が近付くと、その練習のために男たちが毎晩のように家を空ける。消防団活動があるから夫や父親が家に帰ってこなくなる。やめてほしい」という声も出ました。消防団のメンバーは男性が多く、いわば男社会です。男性たちは、こうした視点で消防団

について考えたことはありませんでした。女性の視点から消防団をとらえることで、問題点に気づいたのです。さらに話し合いを重ね、地域を守るためには、女性も男性も一緒に消防団活動を考えていくことが大事だ、となりました。2011年4月に公開される映画「ふるさとがえり」を見た人のさまざまな思いが、さらに地域のつながりを強くし、消防団活動の変化に向けた足がかりとなることでしょう。

### 男女共同参画の視点

## プロジェクトをきっかけに、まちが動きはじめた

プロジェクトが開始した2007年には恵那市女性消防隊が発足、同年10月の全国女性消防操法大会では、初参加ながらみごとに優勝を果たしています。

また、2010年にはNPO法人えなここを設立、緊急雇用創出事業を活用してスタッフを雇用し、上映会の企画・実施などを行う予定です。当面は映画の上映が活動の中心になりますが、ゆくゆくは恵那市の地域・まちづくりを担う活動へと発展することも期待できます。

## 男性も認めた、女性の力

すべてが初めての映画づくりでは、交渉、とりまとめなどの難しい場面で、女性が行動力、説得力、バイタリティを発揮しました。例えば、ロケのお願いをする際、説明中心になりがちな男性とは違い、女性たちが「私たちもやるから手伝ってください」と交渉することで、ものごとがスムーズに運ぶことが多かったのです。責任者は男性でも、実際に現場をしきって動かしたのは女性でした。とかく



数名から始まったプロジェクトだが、映画づくりのさまざまな過程に参加した市民は数千人にのぼる

形式的になりがちな男性だけの組織に女性が参画することで、まわりの受け止め方も変わり、組織は全く違った動きになるということを身を持って体験したわけです。

## 多様なものの見方・考え方を活かし、女性が参画することが大事

女性の力を目の当たりにして、男性の意識も変わりました。今ではイベントを実施するにも女性がいないととまらない、成功の秘訣は女性の参画である、という流れになっています。

「えな心の合併プロジェクト」は、市民が「女性が男性とは違うものの見方・考え方を活かして参画することが大事だ」と気づいたプロジェクトでもあったのです。

### 団体プロフィール

#### えな心の合併プロジェクト／特定非営利活動法人 えなここ

活動地域：岐阜県恵那市（人口55,111人）  
 活動開始年：2007年（法人設立2010年）  
 代表者：小坂 潤治  
 ホームページ：<http://www.enakoko.com/>  
 役員の構成：理事長1人、福理事長3人、監事2人 計6人  
 会員数：女性25人、男性33人 計58人  
 事業規模：3000万円  
 連絡先：0573-22-9211

# 少子高齢・過疎化を打開する中山間地域の取り組み

特定非営利活動法人 フロンティア清沢（静岡県静岡市）

## 活動開始のきっかけ

### 清沢地区の少子高齢化・過疎化・地域産業の低迷を、活性化へと転換した

特定非営利活動法人フロンティア清沢の活動の原点は、清沢地区における少子高齢化や過疎化の進行、さらに農林業など地域産業の低迷による地域活力の低下です。森林の荒廃、耕作放棄地の拡大、空き家の増加など、地域の環境悪化が深刻になり、この状況を何とか打開しようと、1983年、地区住民が「清沢を考える会」を立ち上げました。翌年、「清沢地区振興会」に名称変更し、「清沢地区振興会女性部」も発足しました。2001年、地域主導による「清沢活性化モデル事業実行委員会」、続いて女性グループによる「万芽の会」が発足し、農産物加工品など、特産品の開発と販売をめざして勉強会や見学会を行いました。2003年、「振興会」は特定非営利活動法人フロンティア清沢として活動を拡大。2004年、清沢ふるさと交流施設「きよさわ里の駅」がオープンし、ラジオの全国放送で、「いのしし丼」が紹介されました。その後も新商品の開発・販売、桜やもみじの植樹、棚田での田植え体験など、様々なイベントを通して情報発信するほか、過疎地有償運送も実現しました。

## 活動の内容

### 中山間地域における地域資源を活用したモデル地域づくり

地方色豊かな食文化の伝承や普及、都市と農山村の交流、桜の植樹、子育て支援、過疎地有償運送など、誇りを持ち、安心して支え合えるシステムづくりを実践しています。

#### ◎「きよさわ里の駅」運営

加工販売施設「きよさわ里の駅」で地元の農林産物や加工品を販売しています。また、市中心部での路上販売やスーパー、大型小売店舗への出店もしています。「きよさわ里の駅」の利益は、地区住民生活支援活動や環境保全、交流事業に生かされています。

#### ◎地区住民との交流活動

里の駅周辺の遊休農地を借り受け、体験用茶園・農園として再生し、都市住民や子どもを対象に農作業体験を実施しています。また、里の駅近くの棚田を活用して、稲作体験も実施しています。今年度は初めての試みとして、静岡市内の団体と協働で、農作業体験をしながら独身男女の出会いの場をつくる「婚活」イベントも実施しています。

#### ◎地区住民支援活動

2006年から高齢化や過疎化によりバスなどの移動手段のない地区住民に移動のサービスを提供する過疎地有償運送「やまびこ号」の運行を実施しています。清沢地区では、バスが運行されていない地区が6地区あり、そのうち5地区での高齢化率は45%にのぼっています。過疎地有償運送「やまびこ号」の運行（予約制）が実現したことで、高齢者や地域住民の生活の場が広がり、地域活性化の一助に



きよさわ里の駅のパンフレットで紹介している人気の新商品。猪肉マン、いのししコロッケ、よもぎ金つば

なっています。遠いところから通う子どもたちの送迎も検討を始めています。

子育て支援事業では、子育て中の母親を中心としたサークル「あゆママ」を支援。S型デイサービス、清沢幼稚園への弁当提供や、地区住民を対象としたサービス活動（清沢合唱団、健康体操教室、リース作り教室）なども実施しています。

### ◎環境保全活動

耕作放棄地の再生や桜の植樹、相俣棚田の保全を行っています。

### ◎一社一村静岡運動の実施

フロンティア清沢がイベントを企画し、社会貢献を考える企業と地域住民との交流を図っています。



過疎地の足として利用されている「やまびこ号」は予約制できよさわ里の駅の収益やボランティアに支えられている

## 男女共同参画の視点

### 女性の参加で活動範囲が拡大

NPO 法人になる前は 100%男性中心の活動でしたが、法人になってからは、地域の農産物販売所の開設をきっかけに、会員の約半数が女性となり、男性・女性が共に活動するようになりました。役員、スタッフ、ボランティア、会員と、専門家を含め、様々な形で参加しています。「地域活性化の活動は女性抜きではありえない」と気づいたことで、活動の幅も広がりました。相互に目的と使命を持って活動に携わることで、地域内での信頼も高まりました。子どもたちのふるさと体験や、男女の交流の場など、次々新しい企画を打ち出し、活気のある楽しい地域づくりを進めています。

イベント、運転手、里の駅の裏方、耕作放棄地の再生等は男性ボランティアスタッフが主に担当しています。「きよさわ里の駅」では、農林産品や弁当・昼食・加工品の販売や市街地への出張販売を、約 20 人の女性有給スタッフが中心となって行い、子育て支援などの事業にも女性が関わっています。

### 力を合わせて地域ブランドを創出

「きよさわ里の駅」では、「いのしし丼」「猪おでん」「猪肉マン」「きよさわよもぎ金つば」などが人気です。「獣害被害を逆手に取った地域ブランドの創出」として、地区住民の発想と専門家を巻き込んだ取り組みが評価され、2010 年、第 8 回日本都市計画家協会賞静岡支部賞を受賞しました。2010 年には、地域活性化と自立に向け、こうした取り組みをさらに進めるために、お茶に継ぐ特産品として、地域を挙げて「清沢レモン」の栽培も始めました。将来的には生産・加工・販売までの 6 次産業化をめざしています。

## 団体プロフィール

### 特定非営利活動法人 フロンティア清沢

活動地域：静岡県静岡市（人口：720,000 人 清沢地区の人口は約 1300 人）

活動開始年：1983 年（法人設立 2003 年）

代表者：大棟 鉄雄

役員の構成：女性 4 人、男性 10 人 計 14 人

会員数：女性 70 人、男性 80 人 計 150 人

事業規模：4000 万円

ホームページ：<http://www4.tokai.or.jp/satonoeki/index.html>

連絡先：054-295-3783

## 市民・行政・企業が協働で森を守りそだてる

なごや東山の森づくりの会（愛知県名古屋市）

### 活動開始のきっかけ

#### 子どもたちの豊かな遊び場、雑木林を守る

「なごや東山の森」は、東山動植物園で知られる東山公園と、多くの墓所が集まる平和公園を合わせた約 410ha の広大な区域です。昭和 54 年(1979 年)平和公園の雑木林が破壊されるオリンピックスタジアムの建設候補地問題が起こり、保育園の子育て仲間の女性たちが中心となって反対を唱えました。多数の市民、大学の研究者、教育関係者の協力によって雑木林は守られましたが、その後もこの森を守り続けたいという思いが女性たちを動かし、自然観察会や調査活動を行うようになりました。継続する過程で行政との協働も生まれ、経験者、専門家の意見を仰ぎつつ女性達に関わり 2003 年「なごや東山の森づくり基本構想」の策定に至りました。市民、行政、企業の協働により森を守り育てるという基本構想の要の組織として 2004 年になごや東山の森づくりの会を発足しました。

### 活動の内容

#### 森づくりから共生型社会の実現をめざす

市民と行政の協働によって策定した「なごや東山の森づくり基本構想」の実現に向けた活動をしています。

##### ◎定例森づくり活動

毎月第 1 日曜日に広大な森の中の一角を定め、保全作業を行います。参加者は子どもを含む個人会員、企業会員の社員のみなさん。雑木林の下草刈り、湿地の手入れ、竹林の手入れとハードな作業を、女性も子どもも男性も年配者も参加者それぞれが協力しながら行います。

##### ◎さまざまな班活動

定例会の他に班活動があります。

○平和公園里山班と東山南部里山班は、里山の再生・保全を目的とし、それぞれ月に 1、2 回の活動で雑木林、湿地、竹林などの手入れに汗を流します。

○子ども東山の森づくり隊は、年 4 回の子どもの森体験イベントを企画実施するための活動です。企画によっては 80 名を超える参加者（隊員、付添、子ども、スタッフ、行政）があり、子どもたちが多様な森を体験する機会となっています。



定例森づくり活動の丸太運びでは、それぞれの持ち味も生かして作業する



子ども東山の森づくり隊では、まず観察、そして森づくり体験



田んぼ班の稲刈りにはたくさんの子どもたちも参加した

○竹くらぶは竹林の再生を目的として、女性たちが中心となって始めた活動です。

○田んぼ班、畑班、炭焼班は、2009年に平和公園南部が「くらしの森」として整備されたことでできました。里山の暮らしを体験し、自然との共生を体験する場となっています。

○調査活動班では、地質学的、生物学的、歴史学的などさまざまな分野の森の資源を調査し、森づくりに生かしていきます。

○広報班では会の活動を広くアピールするために、広報誌「東山の森たより」を作り、ホームページの更新なども行います。

### ◎活動拠点里山の家

2009年に整備された平和公園南部「くらしの森」に、散策者の休憩所と東山の森づくり活動拠点施設を共用する形で「里山の家」が開館し、会員が土日祝日に森の案内もしています。



活動拠点“里山の家”は2010年9月にオープンした

### 男女共同参画の視点

## 個人、市民団体、行政、企業など、多様な立場の人が活動している

活動メンバーの立場は、個人、市民団体、行政、企業と多岐にわたり年齢も様々です。東山の森を守り育てていこうと考える人々で、男女構成比は6：4で男性がやや多いですが、参加者ひとり一人の個性と能力を生かせる場になっています。毎月第一日曜日の定例森づくりの会は、初めて参加する人にとってのハードルを低くして、女性や子ども、多様な人の参加を促しています。雑木林や竹林の手入れ、湿地の動植物のすみかを守る湿地再生などを中心に、森づくりのスキルアップとなかまづくりを目的とした里山学校、自然の恵みを利用したクラフトやハイキング・自然観察など、誰もが楽しみながら森づくりに関われる多彩なプログラムを用意しています。

役員の男女構成比は7対3で男性が多いですが、代表は女性です。柔軟な発想と十分な対話のできる人材が活動には必要だと考えています。

## 自然との共生を深めることは多様な人格を認め合うこと

班を結成してのさまざまな活動では多くの会員がお互いの役割を尊重し責任を担う形が定着し、定例化し継続しています。力仕事を含む自然の中での作業は、参加者それぞれのやり方を尊重することにつながります。今後は上記以外に研究会やシンポジウムを企画し、今まで以上に共生型社会の実現に向けた取り組みを探っていきたいと考えています。

### 団体プロフィール

#### なごや東山の森づくりの会

活動地域：愛知県名古屋市（人口 2,263,585 人）  
 活動開始年：1979年（会設立2004年）  
 代表者：滝川 正子  
 役員の構成：女性3人、男性7人 計10人  
 会員数：女性62人、男性82人 計144人  
 事業規模：—  
 ホームページ：<http://www.higashiyama-mori.sakura.ne.jp/>  
 連絡先：052-751-9510

## 自分たちの島は自分たちで守ろう

特定非営利活動法人 いえしま（兵庫県姫路市家島町）

### 活動開始のきっかけ

#### 産業の衰退、姫路市との合併。島の元気を取り戻そう

家島町は海運、採石、漁業が盛んな島でしたが、海運、採石業の衰退や2006年の姫路市との合併により、地域に元気がなくなっていました。こうした状況をなんとかしたいと島の有志の女性たちが立ち上がりました。播磨灘で獲れる「世界一」の魚で特産品を作っています。また、合併により廃刊となった広報誌に替わり、地域新聞「いえしま」を発行しています。地域の催しや島民の暮らしを掲載し、3ヶ月に1回程度、全戸に配布しています。

### 活動の内容

#### 島のおばちゃんが、漁師が、島の外の若者が、みんなで一緒に

##### ◎コミュニティバスの運行

家島には坂道が多く、公共交通がありませんでした。特定非営利活動法人いえしまでは、設立当初から高齢者がゲートボールや診療所へ行く際の車送迎を行っていました。季節毎に取れすぎた魚、海苔の値段が下がった時などには、それをお惣菜にしてたくさんの世間話と一緒に高齢者宅に配りました。2010年からは、2路線・18便の市営コミュニティバスの運行が始まり、いえしまのメンバーを含む、男性2名・女性2名がシフト制でドライバーを担当しています。多い日で1日50人ほどの利用があります。

##### ◎オープンウォータースイミング

毎年初夏に島から島へ泳ぐ「ひめじ家島オープンウォータースイミング大会」（家島町観光事業者組合主催）が開催されます。いえしまでは、参加者への食事の提供など、運営をお手伝いしています。大会には、1kmコースと3.2kmコースがあり、合計約400名が参加できますが、毎年希望者が多く抽選になっています。漁師が船で先導してくれます。

##### ◎いえしまゲストハウスプロジェクト

採石業で栄えていた頃の豪邸がそのまま空き家になっていました。また姫路市と合併したことで、姫路城が身近な観光資源となりました。それらを活用したモニターツアーを2007年から開始しました。地元の旅館業に配慮し外国人のみにターゲットを絞り、これまで5回開催し、約60人が島を訪れました。おばちゃんと料理を作ったり、漁師と交流したりと漁村を体験してもらっています。また島の観光やまちづくりの担い手として、「いえしまコンシェルジュ」をこれまで10名育成しています。コンシェルジュの中には、定期的に島に通っている若者もいます。



モニターツアーでは外国人に家島町の食材で料理の講習をした



## ◎千里ニュータウンから、日帰り交流会ツアー

高齢者の一人暮らしが多い千里ニュータウンの皆さんに、家島の新鮮な食材を食べていただくため、2009年より年に3,4回程度、千里ニュータウンで即売会をしています。また夏には、お孫さんを連れて島に遊びにきてもらうという交流会をしています。料理をするのは主に女性ですが、男性もニュータウンの皆さんをもてなしたり、味付けや食べやすさについての意見交換をしています。



家島の日帰り交流会ツアーで、千里ニュータウンの子どもたちが、海苔工場の見学で目を輝かせた



家島の食材で作った料理を囲んで、千里ニュータウンの皆さんとの昼食会をした

### 男女共同参画の視点

## 漁師といえしまが情報交換、獲れた分だけ商品を作る

漁師から、大量にスズキが獲れたが、売っても船の燃料代の方が高いから捨てて帰るという話を聞き、「おいしい魚が誰にも食べられず海に捨てられるなんて、悲しすぎる」と思い、そのスズキを引き取って味噌漬けを作ったのが、いえしまの特産品づくりの始まりでした。漁師といえしまが情報を交換しながら、その時に獲れた魚で獲れた分だけ商品を作るというやり方をしています。

## 「気づいたこと」を「行動」につなげ、地域を巻き込みながら活動を推進

自分が気付いたことを提案すると、誰かがアクションを起こす協働を大切にしています。またボランティアの学生や行政も巻き込みながら活動を進めています。学生が社会人になった後、各分野で得た知識をもって還元しに帰ってきてくれるのは、大きな喜びです。

## 近所づきあいとは違う、同志のようなつながりができた

生活者の目線で気づいた問題の解決に向けて地道に考え、取り組む活動を通して、高齢者の移動手段をつくったり、島内の生産・加工・販売のルートをつなぐなど、地域が助け合えるしくみがしっかり作られました。

いえしまのメンバーにとっては、辛い時も、ものづくりの仲間が心の支えになり、島のためにもなるなど、活動が生きがいになっています。いえしまは、近所づきあいではない同志のようなつながりであり、「仲間がいるから島に住み続けたい」と「ちっちゃい成功」を楽しみながら活動しています。

### 団体プロフィール

#### 特定非営利活動法人 いえしま

活動地域：兵庫県姫路市家島町（人口 6,848 人）  
 活動開始年：2006 年  
 代表者：河部 恵子  
 役員の構成：女性 4 名  
 会員数：女性 16 人、男性 4 人 計 20 人  
 事業規模：1300 万円  
 ホームページ：<http://ieshima.org/index.html>  
 連絡先：079-325-1131

## 若者の世代が担う共存共栄のまちづくり

城崎文化フェスタ実行委員会（兵庫県豊岡市城崎町）

### 活動開始のきっかけ

#### 観光地・<sup>きのさき</sup>城崎を担う若者の力を結集し、地域振興の活動の強化・拡大

城崎温泉は兵庫県北部の日本海側に位置し、円山川の支流<sup>おおたに</sup>大谿川沿いに広がっています。1300年もの歴史を誇る温泉街で、7カ所ある外湯（共同浴場）を中心に発展を遂げてきました。

城崎文化フェスタ実行委員会は、1996年に兵庫県但馬地域で取組まれた「但馬理想の都の祭典」の際に、城崎温泉のアピールとして企画されたイベント「ゆかたのファッションショー」を運営・推進するために地域の若者が中心となって発足しました。その後、20代～30代の若者の力を一つに結集し、商工会青年部、旅館組合2世会、城崎温泉湯煙り太鼓の3団体と一緒に、K's連絡協議会をつくり、観光協会、旅館組合、町行政などがそれぞれの立場で独自展開されていたイベントや宣伝活動を横のつながりで、まとまって推進する機能を発揮しました。

### 活動の内容

#### 「ゆかたの似合う城崎温泉」をキャッチフレーズに、まちの魅力を高める

##### ◎デザインゆかたのレンタル

ゆかたのファッションショーで提案したデザインゆかたの評判がよかったことから、デザインゆかたをレンタルする取り組みが始まりました。最初は1商店から始まった取り組みでしたが、今では各旅館が実施するまでに普及し、観光客はそれぞれの個性や好みに応じて選んだデザインゆかたに身を包み、街を散策しています。

##### ◎ゆかたご意見番

デザインゆかたで街を散策する観光客をサポートするのが「ゆかたご意見番」です。旅館以外の商売を営む町内の酒屋、本屋、金物屋などにも協力を依頼し、観光客にゆかたの着こなしをアドバイスしたり、外湯に入った後の着崩れを手直しを手伝っています。

##### ◎城崎ゆかたフェスタ

毎年開催される「城崎ゆかたフェスタ」は、新作ブランドゆかた、城崎オリジナルゆかた、地元のシルクゆかた、豊岡の鞆など、多彩なラインナップでもりあがります。プロのモデルや各旅館の若旦那など、多数の参加者がオリジナルゆかたで優雅に変身します。情緒ある城崎の街並みとゆかたのファッションショーなどのイベントに観光客が多数訪れます。



ゆかたのキーワードに多彩なデザインが特徴的に行われる「城崎ゆかたフェスタ」

## ◎みんなの傘

「みんなの傘」は、外湯めぐりの途中で突然に雨が降ってきた時、観光客や地元の人が気軽に借りることができる傘です。素朴な発想ですが、雨の多い土地柄ならではの心遣いが感じられる試みです。町内 10 箇所に設置した傘の管理や修繕は、城崎文化フェスタ実行委員会のメンバーの仕事です。



みんなの傘の修繕をするメンバー

### 男女共同参画の視点

## それぞれが持てる力を発揮し合う「共存共栄」の精神が息づくまちづくり

城崎温泉では、町全体をひとつの旅館に例えています。古くから「共存共栄」の考え方があり、旅館がお客を囲い込むのではなく、外に出て食事や買い物をしてもらい、街全体が栄えることをめざしていました。多くの温泉地が巨大旅館の出現によって、「まち」そのものの機能や情緒性を失っていく中で、城崎温泉は 100 軒ある旅館やまちの施設、住民が一体となり、観光地の魅力をつくっています。それぞれが持てる力を発揮し合う取り組みの中に、今も「共存共栄」の精神が息づいています。

## 旅館の若旦那衆だけではできないことに気づき、活動の輪が広がった

当初、「ゆかたフェスタ」は、旅館の若旦那衆が中心となって企画していました。着付け・メイクアップなどで女性に協力を求めたことから、表舞台に出ることの少なかった女性たちが主体的に活躍する場面が徐々に増えていきました。今では「男性だけではできない」活動です。

その後も、城崎が好きで、城崎のために何か頑張りたいという思う人に広く参加を求め、今では旅館、飲食店、商店、公務員、主婦、寺院関係者など多種多様な立場の人が活動に関わっています。

## 女性たちが新しいイベントを立ち上げる

1999 年には女性に焦点をあてた「きのさき温泉 YOSAKOI まつり」がスタートし、今では参加者も 40 チーム 800 人を数え、城崎の初夏を彩る風物詩となりました。

2006 年からは、女性たちが「古着ゆかたのリフォーム展」を企画・運営しています。使わなくなったゆかたをランプシェード、タペストリー、鞆などにリフォームし、新たな生を吹き込む試みで、人気のイベントとなっています。



古着ゆかたのリフォーム展は、アイデア満載の作品が並ぶ恒例行事になっている

### 団体プロフィール

#### 城崎文化フェスタ実行委員会

活動地域：兵庫県豊岡市（人口 88,735 人）  
 活動開始年：1999 年  
 代表者：井本 裕人  
 役員の構成：女性 5 人 男性 16 人 計 21 人  
 会員数：女性 5 人、男性 18 人 計 23 人  
 事業規模：400 万円  
 ホームページ：<http://www.kinosaki-spa.gr.jp/>  
 連絡先：0796-72-2114（高宮 浩之 元代表）

## 地域の歴史や文化の掘り起こしで、魅力あるまちづくり

特定非営利活動法人 吉備野工房ちみち（岡山県総社市）

### 活動開始のきっかけ

## 子どもたちに大人の生きる後ろ姿を見せよう！が出発点。女性の活動が注目され始めた

1997年に起きた17歳の連続児童殺傷事件をきっかけに、大人の生き方を考えようと、PTAのお母さんたち10人が「吉備の里夢空間21」を立ち上げ、ボランティア活動を始めました。「子どもたちに大人の生きる後ろ姿を見せよう」と初めて企画したのが、アーティストを招いてのコンサート。1300人という予想以上の大成功に、周囲から注目を集めるようになりまし。それまでは活動の場に多くの女性が関わっていても、行政や自治会などの会議の場で決定権を持つのは、9割方、男性でした。ボランティア活動を進める中で、街づくりに女性の視点は必要だと訴えてきたこともあり、少しずつ決定の場（県や市の審議会や実行委員会など）に関われるようになってきました。最近の講演会で、「若い人向けに女性の視点で話してください」と言われるなど、変わってきています。



吉備野工房ちみちの事務所から、吉備野の魅力を企画・発信する

2008年にNPO法人となり、様々な人材や事業者が集う「地域再生プラットフォーム」を構築しようと、「まちを耕し、地域が元気になるタネをまこう！」をキーワードに、魅力ある地域資源の掘り起こしを進めています。活動したいという20代、30代の女性も増え、相談や支援を行っています。

### 活動の内容

## 地域資源の掘り起こしと、人材育成をめざして

吉備野の歴史・文化・自然などを生かしたまちづくりや市民活動の支援を通して、吉備野の魅力を高め、まちづくりの推進と文化の振興をめざして活動しています。

### ◎まちづくりのプロデュース事業

人材育成事業・地域資源の掘り起こし・ガイド育成事業・研修事業・観光事業・男女共同参画事業・JICA研修事業・国内外へのノウハウ紹介事業など。総社市文化振興財団助成金事業「吉備野ものがたり」、内閣府 地方の元気再生事業「古ツーリズムプロジェクト」、ソーシャルビ



「みちくさ小道」で、地元の穴場スポットを楽しむ。案内役は地域をよく知る主婦やお年寄りが務める

ビジネス創出支援事業「備中公社プロジェクト」など、様々なプロジェクトに取り組んできました。

### ◎まちづくりに関するイベント、セミナー事業

しゃべり場「和みの和」、コミュニティカフェ講演会&ワークショップ、体験交流プログラム「みちくさ小道」などを開催しています。

### ◎まちづくりに関する情報発信事業

ホームページの他、吉備野の名産品のリーフレット、「みちくさ小道」ガイドブック、「久米・吉備野八十八箇所」地域マップ、機関紙「みちこみ」などを発行し、イベント・地元グルメなどの情報発信をしています。

### ◎まちづくりを推進する商品開発事業

地域の特産品の「地域ブランド」認定。特産品の販売委託先の開拓。レシピコンクール。特産品の企画・販売（例えば、古墳饅頭「吉備野物語」、玉どうふ「古墳ぜんざい」など）

## 男女共同参画の視点

### まちづくりに互いの強みを出し合って活動する

活動を始めた当初は女性ばかりでしたが、NPO 法人設立時から監事に男性が加わり、インターンシップ生の男性スタッフ5人は、パソコンなどの情報発信を担当しています。女性の強みはフットワークの良さです。結果よりも、小さな活動の積み重ね、「思い」やプロセスを大事にしています。

### 女性の視点を、男性も共感できる言葉で伝える

子育てや男女共同参画社会の構築などという言葉では、男性の興味・関心を引かず、理解もされませんでした。ところが「まち歩き」を通し、「歩道の真ん中に電信柱や段差があると乳母車が通りにくいね」では通じなかったことが、「自転車を通りにくい」という言葉に置き換えると、共感を得られるようになりました。タイヤは同じなので、言い方を変えてみたのです。

### 地域の主婦や高齢者の目線で、地元の魅力を掘り起こす

まち歩きや音楽、アートなどを楽しむ体験交流イベント「みちくさ小道」では、地元の魅力を知ってもらおうと、地域の主婦やお年寄りが講師となり、地元の穴場スポットなど、多数のプログラムを展開。地域のPRと活性化に一役買っています。地元の石仏を巡り歩くプログラム「吉備路八十八ヶ所の旅」では、参加者以外の地元の人が、それまで見過ごしてきた文化遺産の価値に気づき、関心を持つようになりました。2010年は第2回全国まち歩き観光サミットを開催し、約200人、40市町村の方が参加しました。今後は、着地型交流体験観光として、旅行会社では作れない、地元ならではのユニークな企画で、事業の拡大をめざします。

## 団体プロフィール

### 特定非営利活動法人吉備野工房ちみち

活動地域：岡山県総社市（人口：67,373人）  
 活動開始年：1998年（法人設立2008年）  
 代表者：加藤 せい子  
 役員の構成：女性6人、男性2人、計8人  
 会員数：女性26人、男性37人 計63人  
 事業規模：2400万円  
 ホームページ：<http://www.chimichi.org/>  
 連絡先：080-5231-6092(事務局)

## 特産品の真珠を中心とした地域ブランド化の推進

宇和島地域ブランド化推進事業実行委員会（愛媛県宇和島市）

### 活動開始のきっかけ

#### 農水産業の不振や企業の撤退などを機に、地域ブランド力の向上に取り組む

宇和島市では、主要な産業である農水産業の不振や企業の撤退などによる地域経済の低迷、そして人口の高齢化と流出が大きな課題となっていました。

そこで、全国有数の真珠の産地という地域特性を活かして産業の振興・地域の活性化を図ろうと、2007年に宇和島地域ブランド化推進事業実行委員会が発足しました。

委員会は、市、地元各種団体、企業など約29団体（現在は24団体）で構成され、その1つにまちを活性化したいという思いを持った、年齢も職業も異なる女性たちが立ちあげた「まちづくり女性会議」がありました。きっかけは、宇和島市が全日本空輸株式会社と地域協働協定を締結し、女性の視点を活かした中心市街地の活性化をめざして、産業振興や観光振興に携わるアドバイザーを招き、地元の女性たちを集めて実施した真珠PRイベントの意見交換会でした。話し合ううちに、「自分たちで形にしよう」ということになったのです。2008年にはまちづくりBeppin塾と改称、そのアイディアと行動力で「宇和島真珠」と「真珠のまち宇和島」のブランド力を高める推進力となっています。

### 活動の内容

#### 宇和島真珠の魅力を発信し、地域の活性化と人材育成を図る

##### ◎宇和島パールデザインコンテストの実施

真珠を使ったジュエリーや小物などのオリジナルデザインを募集しています。

##### ◎宇和島パール食コンテストの実施

真珠をテーマとした食のコンテストを全国公募により実施し、入賞作品は改良を加えて商品化をめざしています。

##### ◎うわじまデザイン塾の開催

デザインを総合的に学習・研究し、デザインの観点からまちづくりに積極的に参加する人材を育成するため、第一人者による講演会を10回開催しました。

##### ◎うわじまデザイン研究会の発足

宇和島真珠を使ったデザイン開発、新たな産業創出を目指し、専門的な技術研修を実施しました。その後、受講生の有志が企業組合を立ち上げ、あらたな雇用の創出にもつながっています。

##### ◎ANAグループとの協働による広報・宣伝

うわじま牛鬼まつり・海の恋人まつりなどのイベントにあわせたモニターツアーの実施、ANAのホームページや機内誌などでの広告宣伝、オリジナルデザインジュエリーの製作・通販を行っています。



宇和島パールデザインコンテストに応募した最終審査作品の写真パネルと実物を展示

## ◎「宇和島 海の恋人まつり」の開催

事業の成果を発表する場として、パールデザインコンテスト最終公開審査やファッションショー、商店街や空き店舗を活用した街角ギャラリーでの展示、パール食コンテストおよび新商品の販売などのイベントを開催しました。現在は、「I♥YOUと言えるまち」というテーマのもと、市民が主体となった「てづくり」のイベントとなっています。

### 男女共同参画の視点

## 男性にはない発想で女性が提言、新しいビジネスを興す

まちづくりBeppin 塾は、美容師やエステシャン、ブティック経営者など、多様な職業を持った女性たちの集まりです。まちづくりに関する研修会を実施、女性の視点でまちづくりに対する提言を行っているほか、まちづくり通信「Vif(ヴィフ)」を年4回発行しています。

海の恋人まつりでは、パールファッションショーを手掛け、予算がない中で発想した市民からモデルを募る市民参加型のショーを企画。メンバーがヘアメイクを担当しました。その後も、宇和島の若い男性に真珠をPRしてもらうパール王子コンテスト、パール結婚式などを企画・実現しました。

さらに、これまで男性が発想しなかった新しいビジネスを興し、地域経済の活性化にも貢献しています。その一つ、真珠のパウダーを使用した化粧品「花真珠」は、県の補助金等を活用して商品化、また「花真珠」を活用したエステティックサロンを事業化するため、Beppin 塾生の有志で企業組合 Women's Nest を設立しました。

## 女性の企画力・行動力で、経済効果が期待できるイベントに成長

宇和島パールデザインコンテストの公開審査は500人、「宇和島海の恋人まつり」は15,000人の来場者を集め、真珠の産地「宇和島」をアピールできました。女性が企画力・行動力を発揮することで、男女を問わず多くの人々が参加し、経済効果の期待できるイベントに成長しています。



パールデザインコンテスト最終審査対象作品や全日空の客室乗務員とデザイナーの共同によるオリジナルデザインの真珠製品を身につけてのファッションショー



結婚30年目(真珠婚)を迎える夫婦を対象に「30年目のラブレター」を募集。1位の夫婦の「30年目の結婚式」を祝福するパール結婚式

### 団体プロフィール

#### 宇和島地域ブランド化推進事業実行委員会

活動地域：愛媛県宇和島市（人口84,212人）

活動開始年：2007年（実行委員会発足）

代表者：石橋 寛久（市長）

役員の構成：女性0人、男性5人 計5人

委員数：女性1人 男性23人 計24人

事業規模：370万円

ホームページ：<http://www.city.uwajima.ehime.jp/kisaiya/umikoi/index.html>

連絡先：0895-24-1111（商工観光課内）

## 女性リーダー研修の修了者たちが、高齢化が進む地域での生活支援活動を実践している

特定非営利活動法人 ひと・学び支援センター熊本（熊本県天草市）

### 活動開始のきっかけ

#### 女性リーダー研修で集まったメンバーが、地域の高齢化に気づく

「ひと・学び支援センター熊本」は1999年、フラワーアレンジの技術をもった女性たちが、「花」を通して活動する目的で立ち上げた団体です。センターの母体になったのは企画集団「びらす one」。「びらす one」は熊本市の女性リーダー研修を受けたメンバーが設立し、1995年には北京会議に参加、その翌年には「九州女性会議NGOフォーラム」も開催しました。特定非営利活動促進法が成立した1998年には、県内でいち早く法人化を行い、時代の節目をとらえながら着実に歩みを続けてきました。

島原湾に面した天草市は2市8町が合併、旧牛深市は急激に活気を失っていきました。過疎化とそれに伴う高齢化が進むなかで、いつまでも安心した島の暮らしを実現するためには、女性も男性も経済的な自立の必要性を感じ、熊本市から車で3時間の天草市に法人拠点を移し、これまで学んできた男女共同参画を活動の中で実践するために、と立ち上がりました。

2006年には名称も現在の「ひと・学び支援センター熊本」に改め、男女共同参画に造詣のある大学の教授をNPOの代表として迎え、活動の体制を整えました。さらに、天草市に働きかけ、国の地域再生計画の認定を受けて、牛深地区で廃校を改修した多機能型複合施設「南風ん風」（はえんかぜ）を開設し、その運営を行っています。



子どもから高齢者まで誰もがこれまでの経験や能力を発揮できる場所として、多機能型複合施設「南風ん風」をつくった

### 活動の内容

#### 多機能型複合施設「南風ん風」（はえんかぜ）で島の暮らしを支援

多機能型複合施設「南風ん風」（はえんかぜ）は、廃校を活用した3階建の施設。1階は高齢者施設、2階は生きがいや交流の拠点、3階は高齢者の生活支援の場で構成され、地域の活動拠点、居場所としてさまざまな人々から利用されています。

##### ◎介護相談と地域密着型介護施設の運営

認知症デイサービスなどの地域密着型サ

ービス、介護相談、介護予防などの福祉サービスを実施しています。介護予防では新型ボールを使った「元気バルーン体操」があります。



学校図書室の本をそのまま残した絵本ギャラリーは、親子交流の場



週1回のパソコン教室など、人々の学びと活動を支援



### ◎会議室やギャラリーなど地域活動の支援

会議室、調理実習室、パソコン室、生涯学習や趣味の活動、ボランティア支援や研修活動などの活動スペースを提供しています。

### ◎高齢者の住まい、レストランの運営

地域で高齢者を見守るコレクティブハウスや、女性や高齢者が担い手となったコミュニティレストラン「潮深（うしおぶか）」の運営をしています。

## コミュニティビジネスや女性を支援するための講座や勉強会の開催

キャリアアドバイザー養成講座の実施などにより、女性の能力やキャリア支援のための相談事業を実施しています。また、介護福祉の事業者や医療法人向けに、人材育成や各種研修などを行っています。

### 男女共同参画の視点

## 生活に根差す課題を男女が共有し、解決しようと取り組んでいる

センターにとっての男女共同参画とは、学習だけでは何も変わらない、思いやりや学びの成果は実践してこそ世の中を変えていけると考えたこと、そしてそれらを実際の生活に根差す課題の解決に向けた実践に移している点にあります。その理念に基づいた活動は、さまざまな地域の課題への気づきにつながり、相談や生活支援事業の開設、コミュニティバスの提言、介護人材の育成にも広がっています。

## さまざまな人と組織の意見を取り入れることが成長のプロセスと考えている

一つのプロジェクトを立ち上げ、運営していくプロセスには、多くの女性や男性が関わっています。そのなかで、センターのスタッフは、女性だから男性だからということに関わらず、地域住民にとって必要なことなら積極的に行政への発言、提言をしています。またその一方で解決策を見出すためには、男性も含めたさまざまな人や組織の意見を取り入れることが「成長のプロセス」と考えています。

## 男女を超えた地域の信頼関係がつくられている

「南風ん風」（はえんかぜ）の相談では地域からのさまざまな相談を受けるようになりました。高齢男性から「おなご、子どもに相談できるようになった」と言われ、改めて男尊女卑が残るまちで、地域の信頼関係ができたことを確信しました。厳しい状況のなかで苦しいのは男性も同じであり、女性だけでなく男性も楽になるにはどうしたらよいかを考えることが、男女共同参画であること。それが新しいサービスや事業を生み、地域の信頼関係をつくるものだと考えています。

### 団体プロフィール

特定非営利活動法人 ひと・学び支援センター熊本

活動地域：熊本県熊本市（人口725,157人）・天草市（人口92,475人 平成23年2月末現在）

活動開始年：1999年

代表者：古賀 倫嗣（熊本大学教授）

役員の構成：女性2人、男性2人 計4人

会員数：女性15人、男性4人 計19人

事業規模 3000万円

ホームページ：<http://www.hssck.or.jp/>

連絡先：096-354-7252